
プラットホームの先で

上月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラットフォームの先で

【Nコード】

N4560D

【作者名】

上月

【あらすじ】

茫漠とした時間の流れに、わたしはできるだけ早く、良くも悪くも、何かしらの変化が訪れるようにと願った。

停滞

ばあか、と形の整った唇が歪んで、白い息と共にその言葉は声となって出てきた。一瞬、ぐっと身を硬くして、そのあとに妙な緊張を体全体に伝達させるかのように、どくりと心臓が大きく脈打つ。背中を強く押されて、よろめいた拍子に、腕いっぱいに抱えていたバレーボールが全て落ちて四方八方に転がってしまった。わたしは慌てて、ボールを拾いにいく。すると後ろから、大笑いする声が聞こえてきた。嘲笑うように、複数の重なった笑い声は凶器となって、わたしの心を抉る。

「全部拾って、カゴに戻しておいてね」

わたしが所属しているバレー部の部長である歩美が、バレーボール専用の収納カゴを指差す。わたしは下唇を噛んだまま、何も言うことができなかった。直接的に暴力を振るわれるいじめより、こうして間接的に、じわりと心に毒を沁みこませるようないじめの方が、ずっと陰湿で厄介だ。そして何よりも、わたしが反抗することによって歩美を筆頭とした、同じ部員であり同級生でもある友人たちからのいじめがエスカレートすることを恐れていた。

何も言い返さず、ただぐっと息さえも押し殺してゐるわたしに飽きたのか、歩美たちは「帰る帰るお」と口々に言いながら体育館を出ていった。残されたわたしは、あまりの惨めさと悲しさに、唇を震わせる。泣きそうになるのをぐっと堪えて、胃の中に落ちた鉛のようなものが体内を転がる感覚を忘れようと、せつせとボール拾いを始めた。午後に体育館を使用していたのはバレー部のみだったので、転がっているボールの範囲は広い。歩くたびに、履いているバレーボールシューズの裏のゴムと床とが擦れ、キュッキュと音を立てる。そしてその音は、深閑とした体育館内に大きく響いた。

ボールを四つ拾っては、カゴに入れる。それをずっと繰り返して

いるうちに、約二十個ほど落ちていたボールはもうほとんどカゴの中へ入れ終えた。最後の二つをカゴに入れると、ふう、とため息をつく。体育館の冷たい空気が、足の裏まで伝わってくる。指先は特にその冷たさを敏感に感じ取って、もう既に感覚がない。電気を消されて、薄暗いことも手伝ってか、いつも以上に今日は冷え込んでるように感じる。わたしはカゴを押して倉庫へと戻して、早足で更衣室へ向かった。

わたしが憧れていたバレーボールと、今のバレー部はとてもかけ離れていた。小学校の頃にテレビで試合を見て以来、わたしはバレーボールの虜になった。ボールのアタックの勢いだとか、ガードだとか、全てがかっこよく見えて、絶対に中学校に入ったらバレー部に入部しようと決めていた。しかし、時が経っていざ入部してみると、ルールをいまいち知らない人はおるか、未経験者すらほとんどいない状況で、わたしを含め、新入部員の中の数人が、長い間肩身の狭い思いをしなければならなかった。新入部員といっても、小学校のときに地区のバレー部に入っている一年生もいて、その人たちは顧問や先輩からも優遇され、未経験者のわたしたちは何度も悔しい思いをした。けれどもやはり、器用な人や運動神経の良い人は、めきめきと上達してくるもので、ひとり、またひとりとわたしの元から離れて、二番目に上手いBチームや、その次に上手いCチームにどんどん入っていった。わたしも負けるものと意気込んで、毎日遅くまで練習をしたけれど、元々才能がなかったのか、向いていないのか、全く進歩せず、ただただ友達が明るい笑顔で自分のもとから去るのを見送るばかりだった。二年生になって、今度こそはBチーム、できることならレギュラー入りを果たそうと気合いを入れてはみたものの、やはり一年生のときと同様に、そう上手くはいかなかった。いくら頑張っても進歩しないわたしを、同級生の部員も最初は励ましてくれていたのだが、やはり練習試合などで足を引っ張ってしまう。そして、そのたびに、段々と部員の態度が冷たく

なっていくのに、嫌でも気付かされた。最終的に、それはいじめと化して、三年生の先輩が引退したのをいいことに、日に日に陰湿になっていった。後輩も最初はためらいながらもわたしと一緒に後片付けをしていたものの、歩美や副部長の明奈あきなにこっぴどく叱られて以来、全く片付けをしにくれなくなった。

着替えを終えて、はあ、と深く息を吐く。入部して少ししてから買った、茨木東中学校のバレー部のロゴが入った、練習用の長袖のシャツを見つめる。更衣室はわたし以外には誰もいない。片足だけに体重を掛けると、床の木の板が軋んだように小さな音を立てた。情けない、悔しい。この二つの言葉ばかりが頭の中でぐるぐると円を描く。木の匂いにする、古臭い棚に凭れかかって、肩の力を抜いた。窓から傾いた太陽のやわらかな光が差し込んでいて、空中を漂っている埃がきらきらと宝石のように光っている。しんとした、あたかな雰囲気がまた心地よい。誰もいない空間が、今のわたしにとってが一番の憩いの場だった。

そういえば、今日は暗くなるにつれていつもより一段と冷え込むと、天気予報で言っていた気がする。

わたしはエナメルバッグに、練習着を乱雑に突っ込むと、それを肩に掛けて、更衣室を出た。外に出た瞬間、冷たい風が体に体当たりしてきて、体の芯がいつきに冷えてしまったような気がした。空の半分くらいが、もう暗くなっている。寒さを少しでも凌ぐようと、マフラーをぐつと首に巻きつけた。

校庭を眺めながら、やはり冬には色がないなと思った。淡いというよりは薄い感じがする。すっかり禿げ頭になってしまった、校庭を囲むように並んでいる桜の木を見つめて、茫漠とした時間の流れに、わたしはできるだけ早く、良くも悪くも、何かしらの変化が訪れるようにと願った。

感情

雪がちらつてきた。元旦に見た、近所の神社でやっていた焚き火で、たなびく煙から逃げるように舞っていた灰にそっくりだ。ただ、雪は灰と違って、上へは上らず、下へと落ちて、知らない間に消えてしまう。なんとも儚い存在ではあるが、わたしの住んでいるところのように、滅多に雪が降らない土地では、特に小さな子ども達に重宝されている、とても価値の高い存在だ。それに比べてわたしは、バレー部の中ではただの灰塵のような気がする。

わたしは部屋の窓にへばりついて、ガラスの曇りを拭いながら外を眺める。何度か、雪が窓に落ちて、そのままじわりと溶けて水になることもあった。その溶けた雪が、ガラスを伝って窓枠に溜まる。せつかくの休日だというのに、また明日から放課後は部活動に出なければいけないと考えると憂鬱になってしまふ。ずっと胃が重たくて、本当に鉛玉が中で転がっているような気がして仕方がない。出てくるのはため息ばかりで、あまりの世の中の不条理さにわけもわからず叫びだしたくなる瞬間さえある。学校が嫌いなら燃やしてしまえばいい。部活が嫌いなら潰してしまえばいい。そう考えてはみるものの、気は楽な方向には向かず、最終的にはそもそも自分が消えてしまえば一番いいのだという考えにたどり着いてしまふ。感情なんてものがわたしの中からなくなってしまうのも、またそれはそれでありかもしれないなどとも思う。

ぼうつと、何を見るわけでもなく窓の外の景色をまた眺める。いつもと変わらない町並みの中に、雪だけが少しだけ不恰好にぱらついている。雪が降るほど冷え込んでいるというのに、近所に住む保育園の年長さんくらいの子どもたちが、家の周りで楽しそうにはしゃいでいるのが見えた。母親に無理やり着込まされたのだろう、元の体の細さに比例してはいくら厚着をしている。

子どもたちは、自分の意見を押し付けあうようにぎゃいぎゃいと

言い合い、けれど結局はリーダー格のような女の子が何か意見を言
って、みんなそれに納得したように遊びを始めた。あれくらいの年
の子は、本当に幸せだと思う。お互い他人を評価し合うこともなく、
皆が皆同じであると認識し、そして誰かひとりが少し間違ったこと
を言っても、引くことなど一切せず、何かしら直球で言葉を返す。
喧嘩をしてもすぐに仲直りして、何のわだかまりもなく、また仲良
く一緒に遊ぶ。しかしそれは、プライドや周りの目を気にし始めた
ころから次第にできなくなっていくてしまう。相手に対する偏見や
差別が、たったひとつの言動すら許せなくなってしまうのだ。きつ
と、わたしもそのひとりであり、そうやって差別されているひとり
でもあるのだろうと思うと、悲しくなった。

窓のほんの少しの隙間から入ってくる風に、鼻が赤くなっていく
のが、鼻先の冷たい感覚でわかった。わたしはようやく窓から顔を
離すと、そのまま座り込んでいたベッドに仰向けに倒れた。しんと
した、温度の冷えとはまた違う、冷たい空気が流れているのがわか
る。天井までの距離は遠くて、腕を伸ばしてみても到底届きそうに
ない。真っ白な天井は、明りをひとつも点けていないせいかな薄暗く、
若干灰色にも見える。寝返りをうって、昨晚枕元に充電器を差し込
んだまま置いておいた携帯電話を手取る。着信は一件もない。も
ちろん、メールもだ。てらてらと光る液晶画面の眩さが、ぐっと目
の奥を痛いくらい刺激した。四時五十六分と表示された画面を見て、
一日ももうそろそろ終わりだな、と頭をもたげて長嘆する。やはり
時間は悪意を持って、この柔らかな空間をすぐに流してしまうのだ。

「春美^{はるみ}」

こんこん、とドアのノックの音と同時に、母さんの声が聞こえて
きた。

別に怪しいことをしていたというわけでもないのに、わたしは慌
ててベッドから飛び上がると、姿勢を正して、ドア越しに「なに」
と問いかける。声がいつもの調子かあとから確かめて、別に大丈夫
だな、と確認を終えると、ばれないようにほっと息をつく。なんと

なく、あれほど頑張っていた部活に、ここのところずっと嫌気が差しているということが、母親に対して後ろめたい気がして仕方ないのだ。

「もうそろそろ夕飯の支度するから、春も手伝って」

「はいはい」

わたしは適当な返事をする、携帯電話を閉じて、再び枕元に戻す。耳を澄ますと、母さんが階段を下りていく音が聞こえた。部屋を出る前にもう一度窓の方に寄って、今頃子どもたちはどうしているのだろうと外を覗き見る。すると、もう家路につく時間になったのだろう、子どもたちは遊ぶのをやめて、手を振りながらそれぞれの家への道を歩いているところだった。ふと、女の子のかたまりがあるなと思ってそちらに目をやると、家が余程近いのか、三人の小さな女の子が手袋もはめずに、仲良く手をつないで歩いていた。

――プラットホームの先で 2 (了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4560d/>

プラットフォームの先で

2010年12月31日02時28分発行